

次期学習指導要領改定案についての雑感（1）

ホームページの日記のコーナーでも先月書かせていただきましたが、2月14日に文部科学省から発表された次期学習指導要領改定案。特に今回は学校の指導現場に対して授業改善を打ち出してきました。「知識習得が中心の受け身の学習ではなく、討論や発表などを通じた主体的・対話的で深い学びを促す授業（アクティブラーニング）を行うように」ということです。文科省には、“ただ知識を持っているだけでは通用しない。知識を使いこなし、試行錯誤しながら課題を解決する力を学校教育が養う必要がある。「知識の暗記・再生」を基本とした従来型の学力から、社会の変化に対応できる思考力や判断力を重視した学力に質的変換を図る必要がある”、という問題意識があったためこの改定案が生まれたと言います。

目指す学力は素晴らしいと思います。ただ、いつも文科省には大切な視点が抜けているのです。これについて私の考えを2ヶ月にわたり連載したいと思います。

2001年のゆとり教育の反省の元改定された2011年の脱ゆとり教育。3になってしまっていた円周率を3.14にもどし、消えていた台形の面積の公式を復活させました。この時私が心配していたのが教育現場である学校での対応です。一度ゆるい内容になじんでしまうと、人間はそう簡単に厳しいところに戻れるものではありません。これは指導される者よりも、むしろ指導する者に対して言えることです。“ここまで”でよかった指導内容を“さらにここまで”と伸ばされるのですから、指導する者にはかなりの覚悟と労力が必要とされます。たくさんの業務に追われる学校の先生方にそれが可能であるのか疑問でした。

はたして子どもたちの学力はこの5年間で伸びたのでしょうか。ここに一つの資料があります。当塾の新中1の今年度を含む過去4年間の入塾テスト結果（平均点）です。

	算数実力テスト	国語実力テスト
H17年度	52.5点	68.7点
H16年度	61.7点	69.5点
H15年度	66.8点	71.7点
H14年度	70.0点	67.9点

算数は明らかに下がってきています。一方国語はこの4年間ほとんど差がありません。この原因は一体どこにあるのでしょうか。その答えをもう一つの資料とともに来月示し、私の思う文科省の抜けている視点についても述べたいと思います。